

上越市立城北中学校

校長氏名 佐藤 理仁

推進教員氏名 菊池 里佳

1 令和3年度におけるいじめに関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

命について深く考え、仲間への思いやりや「一期一会」の出会いについて、実感をもって過ごす生徒が増えた。
 不登校生徒及び集団への不応対を見せる生徒の対応について、適応指導教室の場所を今年度使用しなくなったコンピューター室に移動した。十分な広さが確保できたことに加え、一人で静かに学習したいという生徒や、人の目が気になるという生徒に対しても、パーテーションでスペースを区切ることで対応することができるようになった。同時に、iPadを使用した取組にも力を入れることで、より、個の生徒に応じた支援ができる学校体制づくりをすることができた。
 生活委員会が発端となり、登校時に生徒玄関に立って挨拶をする運動が校内で広がった。生徒の自主的な活動として、校長からの表彰や、各種たより等での紹介で称賛した。生徒指導上の困難を抱える生徒や、学力不振の生徒にとっても、自己有用感の高まる取組となり、新たな学校の文化が醸成されている。

2 特に成果が見られた取組の具体

項目	具体的な取組や成果
<p>学校の組織力、教職員の認知力・対応力の向上</p>	<p><法令理解度向上について> ・職員研修（8月） 新潟県いじめ対応総合マニュアル小・中学校編の補足事項等の追記分について、全職員で確認をすることができた。同時にアンケートやチェックリストを行うことで、正答のみでなく、互いに相談し合う雰囲気が高めることができ、チェックリストの正答率も向上した。</p> <p>・全教育課程を通じた人権教育、同和教育の推進。 年間3回（6月、11月、2月）に人権集中学習を実施した。同和教育副読本「生きる」を活用しながら、学年の実態に応じて教材を選び、指導案の検討を繰り返し行った。教員自身の言葉遣いを含めた人権感覚についても見直ししながら、いじめに対する認知力を組織的に高める取組となった。 また、3学期には講師として秋山正道様を招き、職員研修を行った。部落差別問題について、歴史的な背景に基づいた考察がなされ、新たな知見を得ることができた。</p> <p><保護者対応について> 今年度は、感染症対策で保護者と顔を合わせる機会が減少し、学校行事でも保護者参観の叶わないものが多かった。そこで、体育祭、合唱祭ではDVDを作成して希望者に販売し、3年生には卒業記念品として配布することとした。 なかなか実施できなかったフリースクールを、2学期に計画した。人数が集中しないように、期間を長く設け、いつでも参観できるようにしたところ、大勢の保護者の方に来ていただいた。学校評価にも、自由記述で肯定的な意見をいただいた。 また、学校のホームページに、学校生活の様子を写真付きで毎日掲載し、保護者への情報提供を欠かさなかった。保護者の学校評価では、「学校は、丁寧に情報を発信するとともに、保護者や地域の声に耳を傾けている」という項目で、肯定的評価が前期91.3%から後期93.8%と向上した。 保護者の気持ちを考え、最善を尽くす姿勢が大切であり、それが保護者にも伝わることを実感した。</p>  

<p>いじめの未然防止</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒主体の生徒会活動の推進。 グランドデザインにある、学校や学級で自己存在感と他者への信頼感をもち、喜んで登校する生徒を目指して教育活動を行った。生徒会活動では、生徒が主体となってよりよい学校生活を送ることができるよう、従来の校則や学校のルールの見直しを行った。校内にある階段を自由に使えることにしたこと、衣替えの撤廃や、有志の生徒による朝の挨拶、球技大会を毎学期に増やしたこと等、学校生活の充実と共に、生徒会活動への関心の高まりや自己存在感を高める取組となった。生徒の学校評価では、「学校やクラスの生活が楽しい」という項目での肯定的評価が、前期91.5%から後期95.2%に上がった。また、保護者アンケートの「お子さんは、学校に行くのを楽しみにしている」という項目では、肯定的評価が前期81.9%から後期91.5%に大きく上がった。 ・いじめ見逃しゼロスクール運動の推進。 11月に生徒会が主体となり、各専門委員会でいじめの未然防止のために取組を企画した。文化委員会による廻り階段コンサートでは、学年を超えて多くの生徒がピアノやギター、歌を披露し、温かな雰囲気のある時間となっていた。他の委員会でも、昨年度と違う新たな取組を意識し、自由な発想で企画をしていた。生徒の学校評価では、後期新たに「よりよい学校生活を送るために、話し合ったり、協力したりしている」という質問項目を設け、肯定的評価は93.1%であった。 ・全教育課程を通じた人権教育、同和教育 3学期に実施された人権集中学習では、一年間の学びの集大成として、秋山正道様を招いて講演会を行った。1・2年生では、新潟県の高校生代表弁論や最近起こった事件について触れながら、そこから見える人権問題についてを生徒が考えることのできる内容であった。拉致問題や死刑の是非、中高生の自死等、現代社会の抱える問題について、講演後にも自己の中で問い続ける生徒の姿勢が感じられた。 また、3年生には、義務教育を終え、社会に出ること、成人をえながら、「部落差別解消推進法」制定背景と目的についての講話をいただいた。上越市における部落差別問題の歴史や、「部落差別解消推進法」を踏まえて、一人ひとりにできることを考え、人権感覚を高める取組となった。生徒の感想からは、小学校から継続して行っている人権教育、同和教育の積み重ねを感じることができた。
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・GIGAスクール構想の推進。 各学年の情報教育担当が主体となり、iPad活用法の職員研修や情報の提供を行った。職員間でも、互いに教え合う姿が多く見られるようになり、連携が高まった。不登校傾向の生徒や、適応指導教室に通う生徒、その他様々な生徒に対応するために、毎時間の授業後に板書をClassroomのストリームで共有することや、Google Meetを活用して授業の様子をGoogle Classroomで中継する取組を行った。生徒の学校評価では、「授業に意欲的に取り組んでいる」という項目で、肯定的評価が前期92.0%から後期93.4%に上がり、授業を基本とした生徒指導の成果を見ることができた。 ・SNSプログラム授業公開 2年生全学級を対象にSNS義務教育教育プログラム指導案で授業公開を行った。学級の実態に応じてレッスン1～4まで全てを行うことで、来年度の情報モラル学習についてを考える機会ともなった。指導案では、事例からグループでの意見交換を通して自分の考えを深めるものがあり、人によって感じ方が違うことや、どうすればトラブルにならないか等を学ぶことができた。生徒が日常生活の中でとることができる行動について、選択肢が増えることが、今後の課題解決能力を伸ばすことにも有効だと考えられ、今後も道徳やその他の授業でも継続して扱っていくべきだと思う。 生徒の事前アンケートと事後アンケートを比較すると、「SNSでメッセージを送るとき、相手に正しく伝わるかを考える」という項目で、肯定的評価の生徒が93.1%から95.0%に上がった。さらに、「ネットやSNSで困ったり悩んだりしたとき、誰かに相談しようと思う」という項目で、肯定的評価が68.7%から84.3%に大きく上がり、「ネット上で、個人攻撃の内容を見つけたら、身近な大人に相談しようと思う」という項目でも、肯定的評価が64.1%から71.1%に上がった。一人で抱え込まず、相談するという選択肢があるということに加え、生徒と教師の信頼関係が構築されていることを再確認することができた。本プログラムは、予防的生徒指導だけでなく、授業を通して自己理解、他者理解が深まるような開発的生徒指導の役割も担った有効性のあるものであった。

<p>3 今後の課題</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・GIGAスクール構想による、生徒のタブレットの扱いについて 一人一台のタブレットが与えられ、学校生活での様子を写真に撮ったり、動画で記録したりすることが容易にできる環境となった。そのため、生徒間で写真をAirDropで送ったことによるトラブル、写真の加工に関するトラブル等、情報モラルが課題となる事案があった。生徒の学校評価では「メディアに接する時間を気につけて、規則正しい生活を心がけている」という項目で、前期71.0%から後期71.0%と変化は見られなかった。保護者の学校評価でも、「お子さんは、メディアに接する時間を気につけて、規則正しい生活を心がけている」という項目で、前期39.6%から後期36.6%と数値を落としている。今後は、情報モラルに関する授業や、生徒会、専門委員会と共同した新たなルール作りをしていく予定である。 ・不登校生徒及び、集団への不適応傾向を見せる生徒への対応 自らトラブルを解決する能力は、未だに乏しいと感じる。保護者や教職員への相談体制は整っており、話をしてくれる生徒が多いが、一方で、逃避や解決を転嫁する傾向が多く、自ら具体的な行動に踏み出せずにいる姿がある。今後は家庭と連携しながら、改善を図る取組を継続していく。 	

いじめ対策推進モデル校事業 報告書

令和4年2月3日

南魚沼市立大和中学校

校長氏名 青木 新一
 推進教員氏名 大平 彰

1 令和3年度におけるいじめに関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

・夏・冬2回の校内研修によって、職員のいじめに関する法令理解度が高まった。また、いじめの未然防止、早期発見のための校内体制の見直しと整備を図ることができた。
 ・全校生徒を対象に、いじめやSNSトラブルの防止についての講演会を3回実施した。いじめの定義を理解させ、いじめやSNSトラブルを未然に防ぐためのコミュニケーションの在り方を考えさせることができた。

2 特に成果が見られた取組の具体

項目	具体的な取組や成果
学校の組織力、教職員の認知力・対応力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・上越教育大学の高橋知巳教授を講師として2回の職員研修を行った。 第1回は演題を「いじめの未然防止と適切な事後対処」として講演をいただいた。全国で起こった重大事案を通して、見えてくる問題点や背景、いじめ防止対策推進法の解釈など多岐にわたった。若手職員が多い当校ではあるが、全職員がいじめ対策推進法を理解し、いじめを認知したときの初期対応について研修を深めた。 ・第2回は演題を「いじめの認知と対応」として、グループワークを中心に講演をいただいた。いじめが発見できない要因について話し合ったり、SCT（文章完成テスト）を利用したいじめアンケート等について検討したりなどして、当校の取組や校内体制を見直すきっかけとなった。月1回で行っていた従来通りのいじめアンケートを、1月からはSCTを取り入れたアンケートに変更し実施してる。意外な生徒が問題を含んでいる答えを書くなど、従来のアンケートでは見えていなかった実態を把握することができた。
いじめの未然防止	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度から、リーダー育成と学級集団づくりを目的として、月1回班長会を実施している。班長が自学級のよさや問題点、改善策を話し合うとともに、学級内で不安や悩みを抱える生徒などの有無について意見交換をすることで、自治的で親和的な集団づくりにつながっている。 ・SNS教育プログラムを全学級で取り組むこととした。1、2年生は1つのレッスンを、3年生は全てのレッスンを扱う予定である。先日、Lesson 1を3年生で実施したが、生徒は自分と他者との考え方の違いに驚いていた。また、目、耳、話の流れなどの情報が会話には大きな影響を及ぼすことを知り、SNS利用時にはそれらに十分留意することが必要だと理解した。 ・NAMARA講演会では、講師の親しみやすいキャラクターと軽快な語り口によって生徒は1時間の講演を集中して聞いていた。講演を通して「人は皆、考え方が違うこと」「人を賞賛することがいじめをなくしていくことにつながる」など、多くの学びを得ることができた。 ・生徒会を中心に「いじめ見逃しゼロスクール集会」を実施した。朝読書の時間に、いじめを扱った資料を読み、1人1人が「いじめの未然防止」について自分の考えをもって会に臨んだ。また、会の中では小学校6年生児童と小グループで話し合いを行った。生徒の企画で進め、生徒目線での問題提起をすることで、生徒の考えが深まった。 ・保護者に対して、SNSの利用に関する啓発文書を合計3回発出したことで、例年と比べてSNSのトラブルの件数が大幅に減少した。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・授業公開（SNS教育プログラム）の準備を通して、職員が知見を深めると共に、いかに生徒に伝えるか工夫を重ねた。その中で、様々なツール・ソフトがあり生徒が扱うには非常に危険のあるソフトの存在なども知ることができた。

3 今後の課題

・今後、本校でも学習用端末（iPad）の持ち帰りが始まるので、様々な問題に対処できるように、インターネットに潜む危険性やメディアとの上手な付き合い方等についての指導が不可欠である。・教師は生徒の変化や行動に気を配り、変化や異常が見られる場合には、すぐに生徒の話に耳を傾け、対処することが更に必要になってくると考える。そのためにも、働き方改革を推進し、生徒に向き合う時間を増やす必要がある。生徒と過ごす時間を増やし、信頼関係を築くことが大切になる。全ての職員が工夫し、行事や会議、仕事内容を精選し、時間的なゆとりを持つことが必要になると思う。

新発田市立加治川中学校

校長氏名 星 渉

推進教員氏名 藤原 明

石井 仁

1 令和3年度におけるいじめに関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

「いじめの起こりにくい学校づくり」を目指して、マズローの欲求階層説の基盤三層である①睡眠や食事等の「生理的欲求」、②身体的安全や心理的安全を確保したい「安全欲求」、③人とかかわっていい関係でつながりたい「愛と所属の欲求」を満たす教育活動を行うことでストレスを緩和し心が前向きで安定したウェルビーイングな状態を意識した。具体的には「眠育等の生活習慣づくり」「かかわって学ぶ授業づくり」「人間関係づくり」「生徒が生徒に働きかける生徒会活動」等に取り組む実践研究を行い、各種調査で比較的良好な検証結果が得られている。また、職員研修を充実することで、いじめの認知力を高めるとともに、いじめの兆候を察知したならばすぐに組織的に動ける職員体制を構築している。

(1) 人間関係づくり

年2回の学校評価やHyperQUの結果、全国学力テスト学習状況調査や変化から見た傾向

①表1「学校の居心地がいい」が91.8%（1学期）から96.4%（2・3学期）に向上した。表4HyperQU「学級満足群」の6月と12月の比較では、1年生が低下したものの、2・3年生はそれぞれポイント上昇した。ただし、学年間の差があり、学年が上がるにつれて、向上するようさらなる取組が必要である。

②表2「誰とでも活動でき、話し合いや協力ができる」は96.4%と高値を維持している。表4HyperQUから「3友人との関係」や「6学級との関係」が全国に比べ高い値を示しなおかつ、学年が上がるにつれて向上していく傾向にある。かかわりを大切にする各種活動の成果が表れている。

(2) かかわって学ぶ授業づくり

①「分からないときに分らない」といえる生徒、そのとき全力で支え合う生徒の関係が、SOS支援要請のための関係性向上にもつながっている。上記の(1)人間関係づくりを学校生活で一番大きな比重を占める授業で行う。「一人も独りにしない」、「120%支え合う」教育活動により、表3の1のように相手の考えを最後まで聞き、受け止めて、自分の考えを伝える「聴き合う関係」が高まっている。

②表3の2、かかわりいい関係の浸透した教室で学ぶ生徒は、主体的に学ぶ意欲も全国・県平均より高い数値を示している。

Table with 2 columns: 1学期, 2学期. Rows for 3rd, 2nd, 1st grade. Data: 3rd (95.2%, 97.7%), 2nd (95.0%, 100.0%), 1st (85.2%, 91.7%).

Table with 2 columns: 1, 2. Rows for 1st, 2nd grade. Data: 1st (81, 44, 37), 2nd (81, 42, 34).

Table with 4 columns: 現1年, 現2年, 現3年. Rows for 学級満足群, 総合, 友人との関係, 学習意欲, 教師との関係, 学級との関係, 進路意識, 記簿の尺度, かわり尺. Data: 学級満足群 (41, 63, 56, 77, 81, 76, 83, 88, 95, 88, 95).

(3) いじめの起こりにくい学校づくり

①表5「いじめや差別はどんな理由があってもいけないことだと思う」の肯定的評価が2学期は100%となった。本校で力を入れている「年間35時間の道徳授業」や人権強調週間をはじめとする人権教育・同和教育の成果が表れている。




②表6「友達の言動を尊重して生活している」を100%全校生徒が心がけている状況や表7「困ったことを話題にし、本音を出し考えることができる」が学年が上がるにしたがって高い数値となっており意識化が図られている。こうした結果も、下の生徒の合唱振り返りから分かるように、教師の一方的な指導ではなく、生徒と生徒との関係性を向上する取組が成果を上げている。

Table with 3 columns: 表5, 表6, 表7. Rows for 3rd, 2nd, 1st grade. Data: 表5 (100.0%, 100.0%), 表6 (100.0%, 100.0%), 表7 (100.0%, 97.7%).

本音で言えた合唱練習 (3年女子より) 私は、合唱祭を通してクラスの団結力がもっとも高まったと思います。クラスの目標であった金賞はとることができませんでした。合唱を創り上げていく過程でさまざまなことを高めることができました。たとえば、「本音で言う」です。これはクラスの目標でした。合唱強調週間に開いた学級会でこの意見が出ました。お互いに信頼し合えていないのに、合唱を成功させることができるわけがないということで、目標になりました。私はこの目標があったからこそ楽しく合唱することができたと思います。最後の合唱祭はとても楽しむことができました。

2 特に成果が見られた取組の具体

Table with 2 columns: 項目, 具体的な取組や成果. Content: (1) 年3回の上越教育大学「いじめ・生徒指導研究センター」と連携した研修会... (2) いじめ事例研修を校内研修会、小中連携研修会に広げ、グループワークで行った...

<p>いじめの未然防止</p>	<p>(1) かかわって学ぶ授業づくり ①「受信・思考・発信の聴き合い学び合う授業」の授業構造図を作成し浸透した。 ②新潟大学教育学部教職大学院一柳智紀准教授と新潟市教育委員会本田和彦指導主事による計3回の校内研修が質が高く、学びの多いものとなった。 ③課題解決に向けての「聴き合う関係」が下記の(2)(3)と連動し向上した。 (2) 生徒会によるいじめ見逃しゼロ運動の推進(加治川中学校「LOVE&PEACE」) 生徒の自己肯定感の向上と、他者の良さを見つけるスキルの定着、学級や学年・学校への所属感を深める活動をいじめをしない、させない、ゆるさない運動の原点と捉えた。そこで、1時間目は、学級で自分と他者とのかかわりを円滑にする活動を行った。自分がネガティブだと思ふ欠点を、ポジティブに捉えるSSTを行った。自分をポジティブに考える、相手をポジティブな存在に捉えるスキルを獲得した。2時間目は、自分たちの学級を4月から取り組んできた様々な活動を振り返りながら、学級の良さを発信し、課題や問題を把握する場を設定した。3時間目は、全校で、縦割り活動である委員会ごとに共有ツール「えんたくん」を活用して、課題や問題点の改善方法を異学年交流・話し合いの形でを行った。この取組に対し、2学期末と3学期生徒総会時に、振り返り活動を行い、生徒会が自分たちでPDCAサイクルを回し向上につなげた。 ① 年3時間に増やし、個・学級・全校の良さを全校で考える取組を行った。 ② 加治川中学校人権宣言第1条「他人の個性を尊重せよ」制定した。 ③ 異学年交流を充実し、自分たちの課題を全校で考える体制を作った。 (3) 生徒会による「かかわり合い」活動の質的向上 ① 異学年交流会・・・学年の壁を越えてかかわり合い関係づくり ② 生徒朝会の工夫・・・委員会主催活動で劇やエンカウンター活動への変化 ③ 年2回全校レク大会・・・スポーツ&ゲームによる活動 こうした「かかわり合い関係」を高める活動が、自己開示や相互理解につながった。他者への関心をもち続けることができ、いじめの認知や相談がやりやすい環境づくりにつながっている。</p>	   <p>【いじめに気づいたとき、見て見ぬふりをしないで友達や先生に相談する】</p> <table border="1"> <tr> <td>表8</td> <td>1学期</td> <td>2学期</td> </tr> <tr> <td>3学年</td> <td>100.0%</td> <td>100.0%</td> </tr> <tr> <td>2学年</td> <td>100.0%</td> <td>100.0%</td> </tr> <tr> <td>1学年</td> <td>97.1%</td> <td>94.4%</td> </tr> </table>	表8	1学期	2学期	3学年	100.0%	100.0%	2学年	100.0%	100.0%	1学年	97.1%	94.4%
表8	1学期	2学期												
3学年	100.0%	100.0%												
2学年	100.0%	100.0%												
1学年	97.1%	94.4%												

<p>その他</p>	<p>(1) 中学校区連携した「眠育」の取組 ① 就寝・起床時間、学習時間をきめ、三点固定の取組として同じサイクルで生活を送り、心身健全な状態を保つことで、いじめの要因を減らす。 ② 加治川地区学校保健委員会を立ち上げ、小さい頃からの睡眠の大切さを小学校や保育園の保護者に啓発する機会となり、地域の子育て支援クラブにも広がり、地域全体での継続した取組を行う機運が高まっている。 (2) 教師の指導観の転換 ①「承認・寛容・支援と受容・傾聴」のモードへ切り替え、生徒の安心安全な教育環境を目指した。「威圧と操作と管理」のモードを一掃し、全教職員で意識して教育活動を行った。 ② 生徒の良さに気づき、変化を読み取るアンテナをもつための、日々凡事徹底を図る。生活ノートへの丁寧なやりとり、普段から声をかけ、生徒の活動の場に立ち見取る教師集団を目指した。 表9～11からは、教師が生徒との関係性が向上し、いじめや悩み相談がしやすく、生徒の変化に気づきやすい教師の意識改革と学校風土づくりが進んでいることが分かる。</p> <table border="1"> <tr> <td>表9</td> <td>1学期</td> <td>2学期</td> <td>表10</td> <td>1学期</td> <td>2学期</td> <td>表11</td> <td>1学期</td> <td>2学期</td> </tr> <tr> <td>3学年</td> <td>97.6%</td> <td>100.0%</td> <td>3学年</td> <td>100.0%</td> <td>100.0%</td> <td>3学年</td> <td>100.0%</td> <td>100.0%</td> </tr> <tr> <td>2学年</td> <td>97.5%</td> <td>97.5%</td> <td>2学年</td> <td>95.0%</td> <td>100.0%</td> <td>2学年</td> <td>100.0%</td> <td>92.5%</td> </tr> <tr> <td>1学年</td> <td>88.2%</td> <td>97.2%</td> <td>1学年</td> <td>91.1%</td> <td>100.0%</td> <td>1学年</td> <td>85.3%</td> <td>100.0%</td> </tr> </table>	表9	1学期	2学期	表10	1学期	2学期	表11	1学期	2学期	3学年	97.6%	100.0%	3学年	100.0%	100.0%	3学年	100.0%	100.0%	2学年	97.5%	97.5%	2学年	95.0%	100.0%	2学年	100.0%	92.5%	1学年	88.2%	97.2%	1学年	91.1%	100.0%	1学年	85.3%	100.0%
表9	1学期	2学期	表10	1学期	2学期	表11	1学期	2学期																													
3学年	97.6%	100.0%	3学年	100.0%	100.0%	3学年	100.0%	100.0%																													
2学年	97.5%	97.5%	2学年	95.0%	100.0%	2学年	100.0%	92.5%																													
1学年	88.2%	97.2%	1学年	91.1%	100.0%	1学年	85.3%	100.0%																													

3 今後の課題

<p>(1) 生徒と教職員が入れ替わる中での手法や指導観の継続 検証結果から本事業により目指す生徒の姿に概ね近づいたと考える。コロナ禍で生徒は「学校で学べるありがたさや価値」を理解し、学校生活に前向きに取り組んでいる。特に3年生は授業や生徒会活動でかかわって活動できる温かい人間関係が育っている。いじめの起きにくい状況であり、後輩の良きモデルとなっている。しかし、毎年、教員と生徒が入れ替わる中で、この状態を維持できるかが課題である。生徒の中に「伝統と校風」として根付かせ、教師集団としても「かかわって学ぶ授業づくり」や「計画的な人間関係づくり」の手法、「承認・寛容・支援と受容・傾聴のモード」の教師の指導観などを継承し、生徒の自己肯定感や温かい関係性を継続して高めていけるかが課題である。 (2) 外部の専門家を招聘しての校内研修の充実による職員集団づくり 校内研修の質を高め学びの多い研修にするためには、自校の課題にあった適切な専門家を招聘する必要がある。それらの研修や日々の実践を通して、教職員がつながり同僚性を高めることで組織的対応が確実にできる体制づくりにつながる。毎年、新たなメンバーで研修を通して機能する教職員集団づくりを進める必要がある。 (3) 教育相談体制の向上と推進 「承認・寛容・支援と受容・傾聴」のモードへの教師の指導観の転換、を全教職員で意識するとともに、生徒と生徒・教師と生徒との関係性を高めてきた。そして、アンケートの回答方法を変更し自宅で記入を行ったり、SCT(文章完成法)アンケートの試みを行ったりしてきた。アンケートから生徒の困り感を把握する事例もあった。今後は、生徒が教師に対し、気兼ねなく教育相談を行う体制づくりを推進する中で、教師の教育カウンセリングの力量を高めていきたい。 (4) 課題を抱えた現1年生の成長の促進 本年度の1年生は小学校から解決しきれずにきた人間関係の課題を成長の過程で解消していく必要がある。具体的には集団と個の両方を高める取組が求められる。今後2年生・3年生と学年進級に伴う成長を続け、学年が上がるに従って良くなる加治川中の伝統と校風を受け継いでいけるようにしなければならない。新2年生は新1年生と新3年生に挟まれ、学校全体として向上する中で中堅学年としての確かな成長を確実なものとしていきたい。 (5) いじめが起りにくくするための学校・家庭・地域の連携 いじめが起りにくい状況とはマズローの欲求階層説の基盤三層を学校・家庭・地域が連携して良好な状態にすることである。まだ、中学校が中心となった活動に留まっており、小学校や家庭・地域に広げた取組にしていく必要がある。幼少期からの集団遊びやかかわり、つながる人間関係づくりを行い、発達段階に応じた社会性の育成を目指す必要がある。また、この取組をモデルとして全市や全県に広め、いじめの未然防止と認知力・対応力の高い学校を増やしていくことも目指していきたい。 (6) 市教委との連携の工夫 いじめ発生時からの連携した取組を推進し、事実確認の正確性や解決に向かうための確実性をより高めるための工夫が必要である。いじめの多発するようでは対応に困難をきたすため、いじめを未然に防止するための取組を市教委と連携して発信する。また、いじめを認知した場合は、初期対応においても市教委に状況と対応方針を伝えるなど、密接に連携をとって対応できるようにしていきたい。</p>
--